



イムス三芳総合病院が新築移転 災害に強い急性期病院としてスタート

日本内外に85の医療介護施設を運営するイムスグループは1日、今まであった埼玉県三芳町にあった総合病院を新築移転し、新しいイムス三芳総合病院となった。同院は1977年の開設以来、一貫して地域医療の中核を担ってきた。三芳厚生病院と称した時代もあり、そのときは急性期と慢性期医療が混在したケアミックス型病院だったが、2007年にイムス三芳総合病院と改名してからは、急性期医療を担う体制づくりを進めてきた。いよいよ新築移転が実現し、この3月から新しい三芳総合病院としてスタートした。

新病院は鉄筋コンクリート9階建て。敷地面積は1万4574.46㎡、延床面積1万4161.45㎡、病床数は238床と以前との変化はない。診療科は内科、呼吸器内科、循環器内科、消化器内科、糖尿病内科など19診療科を標榜。MRI他の医療機器については最新の機器を導入しているため、都心の病院と遜色のない装備になった。さらに旧三芳総合病院では隣の富士見市にあるイムス富士見総合病院と合わせて、地域内の救急搬送の7割～8割を担っていたが、新病院でも同様。1階西側には救急センターを設け、救急医療への対応を目指す。

1階は開放的かつ機能的なホスピタルモールとし、各診療部門が明快なゾーニング（配置）されたため、外来患者の動線が確保された。病院建築中に東日本大震災が



発災し、一部設計を変更したという。それまでは災害発生時による停電時は最低限の照明がついていればいいとされていたが、震災の経験から少なくとも24時間は病院機能を発揮するだけの電気の確保が必要と判断。自家発電機の容量を大きくし、さらにはホスピタルモールには災害時には地域住民の避難スペースとして開放することとなっている。

新病院としてのスタートに際し、石田規雄院長は「今後も質の高い医療、患者が満足のいく医療サービスの提供を目指していきたい」と抱負を述べた。